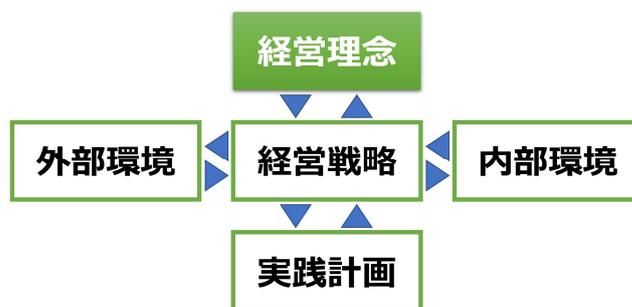


「経営理念」を考える・その1

企業経営漫談士 岡野実空

内外の経営環境を睨み、いざ戦略策定へ！と言いたいところですが、その前に、まずは既存の「経営理念」を見直しましょう。なぜなら、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」、という海図なしの航海はありえないからです。因みに「経営理念」は、「組織目的」と「行動規範」の二つを含みますが、それを確認しつつ実践するのが「仕事」。いま、それらを忘れた単なる「作業」を待ち構えているのは、AI とロボットという強力な交代要員です。



其の1: 『経営観念』

いま企業の経営「理念」の実態は、大半が「離念」。額縁入り掲示されているだけのもの。カードで携帯しているが、ほとんどの各人の意識にないもの。また毎日唱和されながら、単なる惰性にすぎないものなど、その惨状はさまざまです。いずれにせよ、それらに共通する問題は、せつかくの「理念」が具体的な「イメージ」として各自に定着していないこと。「三々な経営」でも散々？書いた通り、「イメージできないことはマネージできない」のです。

また現在、「文字」文化は危機的状況。「文字」情報からではイメージできない人間の激増で、いまや「図」による補完は当たり前。それでも内容が理解できない事態も多発し、世の中には「写真」や「絵」入りの資料や「動画」が氾濫しています。

元々『観念』とは、仏や浄土を「観想し、念じること」。経営でいえば、組織の「あるべき姿」を明らかにし、そこへの到達を願うことです。しかし、言うは易く行うは難し。またそれがプラトンの「イデア」の訳語として用いられ、概念の難度がさらに高まったこともあり、本来の「明らかにされた真意」が、正反対の「ギブアップ」の意味に転じ、そちらの方が多用されるようになってしまったのです。

皆さんミドルの役割は、もちろんその本意の実行。上意を受け、担当する組織のビジョンを『観念』し、それを言葉、図、絵にして関係者と「対話」を重ねつつ、その実現に努めることです。その過程に一切手抜きは許されません。「観念」なさい!!

其の2: 『高処低思』

「低処高思」は、岩波書店の創業者、岩波茂雄の信条。また、暮らしは質素に、志は高くという生き様は、昔の「立派」な方々の書（高思低処もあり）として、あちこちの扁額や掛軸でも見かけます。それが一転、『高処低思』となったのは昭和の後半。戦後の欧米化が行き着き、「立派」と「金持ち」が見事一体化して、「清貧」が死語になってしまった時代のことでした。それはまた、「一億総中流」社会の遺産。上流までは届かないものの、世の下流から遡上した人々が、にわかには高度経済成長の主役を演じた時代の残滓です。しかし宴の後、その多くの人たちが痛感したのは、モノやコトの追求で真の「豊かさ」は得られないということ。さらに、「心の豊かさ」とはなにかという大問題でした。

いま企業経営においても、飽くなき「成長」（実は膨張？）を前提に戦略を考える限り、決して社員や関係者に心の平穏は訪れません。そして社会が求めるその強い要望に応える企業のみが、結果として真の「成長」を遂げることができるのです。

さて釈尊は、その問いに幾度も答えています。際限のない欲望の追求は「心の貧しさ」の象徴であり、「知足」（足るを知る）こそが、真の「豊かさ」であると。近々京都に行ったら、必ず菴安寺に寄り、石庭の反対側の庭先にある蹲踞（つくばい）をじっくりご覧ください。その「吾唯知足」の四文字の中央は、皆さんの『低処高思』への出発「口」です。

2020年3月2日 実空